

## 粥つけ(粥占い)



祭全景

資料提供・文 國枝 浩

稲荷神社のある村には、大てい昔から粥つけがある様ですが、最近では少なくなりました。粥つけとは、農家が作物の豊凶や、台風や早魃など四季の気象を稲荷大明神に占ってもうらう行事で、1月の初午の日に行っていました。上田区は戦前一〇七戸位でしたが、今は三一七戸になって、十の瀬古(組)があり、中でも比較的増減のない組があつて、そこが以前は粥つけをしていました。

神官に依る神事に次いで、神前で大釜に小豆粥を炊き、その中に作物などの名を記した細竹を縄で束にして一緒に炊き上げてから、その竹を二つに割って、中に小豆粥の入った状態で、吉凶を占うのです。竹は前年9月に伐って油抜きをしまして置いておいたのを使います。占いの結果を分厚い帳面



粥の中に入れる竹の束

に書きますが、その書き始めは昭和3年になっていきます。

氏子の人は小豆粥を椀に入れて持ち帰り、床の間に供えてから家中で食べますが、他の組の人は粥づけの結果を早く氏子の人に聞くなど、大変気にしていたようです。帳面に残されているのを見ると、今は気象庁の発表の方を頼ればいいのにと、台風や早魃の心配は大きかったのですね。



竹束を切り離す



粥から引き上げるところ



記帳面の1ページ目



二つに割って粥の入り具合を見る

協力 郷土史の会